

# 千葉 菁実 (ちば・せいみ)

## 1、プロフィール

俳人。初め松濤社高松玉麗に師事、「寂光」ほかに投句。のち青森俳句会に参加、昭和 21 年吹田孤蓬らと新生機関誌「暖鳥」を創刊。教職歴も長く、学校長ほかの要職に就く。

<生没>

1910(明治 43)年 12 月 15 日～1994(平成6)年 11 月 12 日

<代表作>

句集『玄冬』

句集『朱夏』

<青森との関わり>

東津軽郡造道村大字浜館に生まれる。青森師範卒業後、青森市で教職を務め句作に励んだ。

## 2、作家解説

明治 43 年 12 月 15 日、東津軽郡造道村大字浜館字科 88 番地に父利兵衛、母やよの四男として生まれた。本名は正実。男6人女4人の 10 人きょうだいの中で青森師範学校(7年専攻科)を卒業、のち教職に就き、昭和 46 年3月青森市南中学校を定年退職する。その間、菟町小、橋本小、第一中、浦町中、野脇中、南中の各校長並びに東青教育事務所長などの職に就く。

俳句への関心は福士行思、福田空朗らの影響もあるが長兄利衛が利公の号で川柳などの文芸に親しんでいたことにもあった。俳歴は昭和5年松濤社高松玉麗に師事。「寂光」に投句、青師専攻科在学中 20 歳の菁実は「めあてなき若さが悲し土筆揉む」という句をものし、同級生から秀才で詩人と評されていた。

満州事変から支那事変、更に太平洋戦争へと移り、彼の兄弟たちは出征、句友に宮川翠雨が加わり、昭和 14 年合同句集『向日葵』を刊行、15 年3月青森俳

句会創立、機関誌「海流」に編集同人として参加、「宣戦布告雪が動いて血とめぐる」(開戦)重苦しい時代であった。身边では弟繁美が19年レイテ島沖で戦死、限らない悲しみの中で20年4月母やよが急逝。

21年8月吹田孤蓬らと青森俳句会「暖鳥」を発行、菁実が出した案<暖(ぬく)め鳥>が「暖鳥」の誌名に繋がったという。多くの人たちがここで暖められ巣立っていった。「暖鳥」代表の孤蓬は「暖鳥は地方のミニ飛行場だ。巣立つ者はどんどん飛び立って飛翔するがいい。しかし運悪く羽根折れ矢尽きたときは何の遠慮もいらぬ。再び「暖鳥」に降り立てばいい」と言った。

23年佐藤てつと結婚、28年父利兵衛逝去、29年東奥日報社主催県俳句大会、東奥俳壇選者。48年句集『玄冬』を刊行。49年度及び51年度暖鳥賞受賞。53年浪岡町本郷七日会特別講師を務める。60年浪岡町花園公園に句碑が建立。「りんどうの群落ましろき雲呼んで」63年句集『朱夏』刊行。平成2年黒石市法峠寺に句碑「まんさくは糸の花望郷の花」が建立。平成6年11月12日逝去、享年84。

### 3、資料紹介

#### ○句集『玄冬』

図書

1973(昭和48)年11月1日

187mm×136mm

昭和46年3月定年退職後はじめて出版した句集。自作1万句から456句と、「母」「伊豆の旅」のエッセイも含む。エッセイ「母」は、6男4女を育て上げ、躰は根気よく漬けもの上手、末子の戦死に耐えきれず急逝した母の姿を記す。